

旅行者に車いすを託して

札幌市 NPO 法人「飛んでけ！車いす」の会

子供たちの笑顔がカメラの中ではじける――。

NPO法人「飛んでけ！車いす」の会の活動で出会った子供たちを撮影した写真には、車いすにのって笑顔を見せる沢山の姿があった。

同会は、日本で使われなくなった車いすを集めて整備し、旅行者の手荷物として発展途上国の障がい者などへ直接届ける活動を行っている。設立は、1998年（平成10年）の5月。2000年（平成12年）6月にNPO法人に認証された。

設立のきっかけとなったのは、現在は理事・事務局長を務める吉田三千代さんと当時、北海道大学の医学部4年生だった柳生一白（やぎゅうかずより）さんとの出会いだった。

吉田さんは兵庫県の神戸市出身で結婚を機に北海道へ。30年以上、英語教室の講師をし、そのつながりでボランティア通訳も行うようになった。1997年（平成9年）、バングラデシュの障がい者団体の代表が講演で札幌を訪れ、通訳として一緒に回っていたのが吉田さんだった。講演が終わると「バングラデシュは世界の最貧国の1つと言われていますが日本人の私たちにどんなことができますか？」という質問がいつも飛んだ。それに対して代表は「現地に来て、その目で見てください」と何度も繰り返していた。

吉田さんはその言葉がインプットさ

れ、機会があれば訪ねたいと常々考えていたという。ちょうどそのころ、吉田さんの長女がネパールに留学。ある時その娘さんの下を訪れた際、時間ができたため隣のバングラデシュまで足を伸ばしてみた。そこで見たのは日本とは違う障がい者を取り巻く状況だった。移動のための車いすなどが無いのである。現地の状況を知った吉田さんは、日本で使われなくなった車いすを届けたいと願うようになった。

そして次の年、現在会の代表で海外旅行に一緒に行くなど親しい友人の佐藤正尋さんから柳生さんを紹介された。柳生さんは、サークル活動などでインドなどに行くとき、車いすを手荷物として飛行機で運んだ経験があった。20キロまでの手荷物は無料で運べるということを知っていた柳生さんは吉田さんの思いに共鳴。二人は、「1年で30台ずつ車いすを届け、10年で300台届けることができたらすごいよね」など意気投合し、出会って3ヵ月で会を作ることになった。

■「子供たちの笑顔が忘れられない」

活動の出発点となっているのは、老人施設や福祉施設など、車いすを使う施設との連絡から始まる。使われなくなった車いすを引き取りに行き、会の事務所に運んで整備、梱包する。

そして事前にメールやファックスで届けたいと申し込みのあった旅行者の自宅や、旅行者の出発空港である新千歳空

港などへ届けられる。新千歳空港で受け取る場合は、業者による配送になり、手荷物一時預かりカウンターへ届けられ、旅行者がカウンターで受け取る。成田空港や関西空港などの場合は、事前に指定の空港に宅配便で届けられるため、その窓口で受け取ることになる。飛行機に積み込み、旅行先に着いたら車いすを旅行者自らが必要としている人に届けに行くのだ。

旅行者は、メールで事前に送り届ける場所までの地図や行き方などの情報のほか、利用者の体のサイズに合わせて車いすを選んで送るため、名前と顔写真も受け取る。届ける旅行者は観光旅行だけではなくプラスアルファとして何か役に立ちたい、ボランティアがしたいという人たちだ。ひとりで1台を持っていく場合やグループで1台というケースもある。高校生が修学旅行で10台持っていったくれたこともあるという。

旅行者が届けるため、道に迷ったり、途中で壊れたりするといったトラブルもある。しかし「現地の方と交流して良かった」、「子供たちの笑顔が忘れられない思い出になった」という声が多く、リピーターも少なくないという。

■ 発展途上国 78 カ国へ届けられる

届ける先は広がり、ベトナムやタイ、フィリピンなど発展途上国 78 か国、年齢層も3歳から90歳までと幅広い。活動を始めてからの寄付累計は2561台（2016年2月末現在）に及んでいる。海外だけではなく東日本大震災で被災した障がい者にも寄贈するようになった。

設立1年目は30台を目標にしていたが、39台を送り1年目から目標を上回

った。2年目は128台とその4倍以上になったが、最近は年100台に届かない年が多くなった。



車いすが渡されると笑顔がはじける(フィリピン・セブ島)

その理由は、ボランティアスタッフなどの人手不足もあるが、4年ほど前から航空会社の手荷物の重さや大きさ、個数などの制限が厳しくなり、航空会社によって車いすが運べないケースが増えているからだ。

「活動を始めたころは、『手荷物で運んでみませんか?』と気軽に言えましたが、今はまず『どちらの航空会社をご利用ですか?その航空会社でしたら残念ですがお気持ちだけいただいて』と言ってお断りすることも増えました。サイズ制限がより厳しいLCC（格安航空会社）の参入が増えたことでLCCを多く利用する学生さんに運んでもらうのは難しくなっ

ています。今はシニア世代に届けてもらうことが多くなりました。台数を競っているわけではありませんが、できるだけ多くの車いすを運びたいという思いがあるので、現状は厳しい状況ですね」と吉田さん。

会では旅行者の荷物を少なくしてもらったり数人で1台を運んでもらったりするなど手間のかかるお願いをして何とか対応している。また、オーバーチャージ（預入手荷物超過料金）がかかるケースが増えていることから、その負担分をみんなで協力して賄っていくために「オーバーチャージ基金」を設け寄付を募ることも行っている。

■ 企業も活動に協力

設立当初は吉田さんの自宅を事務所にして、整備・保管などは札幌通運の倉庫を借り、月に1度作業に充てていたが、2014年（平成26年）に現在の事務所に移転したことで、事務所と保管場所が同じになりより作業がしやすくなった。

筆者が事務所を訪れるとボランティアスタッフがJICA（青年海外協力隊）を通じて15台の車いすを送るために整備と梱包を行っていた。整備は状態によって異なり、磨いたり部品やタイヤを新しく交換したりする手間のかかる作業だ。

ボランティアスタッフは整備・梱包のほかに事務作業や札幌市内を中心に個人宅や施設から集荷する作業、イベントの運営の手伝いもする。

一番多いときは、学生10人以上が毎日のように事務所を訪れていたというが、今はめっきり減った。逆に増えているのがシニア世代。事務所での整備や梱包はこの世代が中心となり、手慣れた様子で

てきばきと手際よく作業が行われている。

会の活動も長年続いているため、活動当初、若かった会員もシニア世代となり、2010年（平成22年）までは500人ほどいた会員も、現在は半分の250人ほどに。「ボランティアも会員も少なくなっているのに、人手と会費も十分とはいえませんが、人材と資金はどのNPO法人にとっても課題ですが、10年、20年と活動を続けるためにはこの問題は避けて通れません」と吉田さん。

ただ、スタッフだけでなく、企業の手も借りることによって活動の輪は広がっている。特に札幌通運は前述した保管倉庫の提供だけでなく、集荷、新千歳空港までの輸送にも協力。また、「札幌はこび愛ネット」という同社の手掛ける引越しゃ旅行などのサービスを利用する際に「会に還元して」と伝えれば、利用額の5%（一部取り扱い商品は除く）に還元される寄付システムも実施している。

■ 全国の団体とも交流深める

講演活動も積極的に行い、小中学校など様々な場所で講演している。学生たちが活動に参加することも多く、高校生が修学旅行で車いすを運ぶためにスタッフと一緒に整備したり、小学生も整備に参加したりすることもある。

このほか、写真展や音楽祭、現地の言葉を学ぶ講座、毎回好評の車いすの使い方講座など様々なイベントを実施してきた。中でも吉田さんが印象深かったのは、同会主催で車いすを海外に届けている全国の同様の団体が、ニセコに宿泊して交流を深めたイベントだった。「それぞれの団体の活動を知ることによって色んな送り方があることがあらためて分かったり、渡す

先の国がどういう状況なのか情報交換したりすることもでき、すごく意義がありました」と振り返る。



事務所では、小学生もボランティアで整備を行っている

■ 思い出深い出会い

現在、力を入れている活動は、2015年5月に地震があったネパールに車いすを50台届ける「ネパール支援プロジェクト」。2016年3月までに25台を送った。ネパールに旅行する人は減っているものの、旅行者を紹介したり、支援基金に寄付したりすることでこのプロジェクトに参加できる。

吉田さん自身はスタディーツアーでアジア各国を訪れ、これまで、25台以上運んでいる。訪れた国の中で思い出深い場所はフィリピンのセブ島。現地で情報交換するなどした障がい者の1人に1年後に再会すると、研修を受け、障がい者支援団体を立ち上げていることが分かった。その後は、その団体に支援物資を送ったり、車いすの整備指導を行ったりするなど連携プロジェクトを行うようになつた。「その団体が役立ったのは会が送った車いす。フィリピンには子供用の車いすはなかなか届かない。連携したことで子供たちにも行き渡るきっかけになったのではないのでしょうか」と吉田さ

ん。

受け取った利用者からは「車いすが使えるようになって自由に外出ができ学校へも行けるようになりました」という感謝の手紙が会に続々と届けられている。

今まで、車いすを見たことすらなく、どこに行くこともできず母親に抱かれて移動するしかなかった子供たちには、動くものに対する憧れがあるという。車いすに乗った自分が動いていることがわかったときには、とびきりうれしそうな笑顔を見せる。初めて自分の力で動きまわることができるようになった子供たちの輝いた目を見ると、その地を旅するだけでは得られない貴重な体験になる。手荷物一つでそれが叶えられる会の活動は、そんな数々の笑顔と「ありがとう」の言葉で支えられている。

■ 連絡先

〒064-0822

札幌市中央区北2条西28丁目2-8

NPO法人「飛んでけ!車いす」の会

代表 佐藤 正尋 (さとう まさひろ)

理事・事務局長 吉田 三千代

(よしだ みちよ)

TEL 011-215-8824

Email : tondeke@bz01.plala.or.jp

URL : <http://tondeke.org/>